

IV-39

地域に対する愛着・誇り形成の心理過程

東北工業大学大学院 学生員 ○引地 博之
正 員 青木 俊明

1. はじめに

近年、社会的ジレンマ状況における住民の非協力的行動が問題となっている。これに対して若林ら¹⁾は、地域への愛着が住民の地域活動への参加や相互扶助の意識を高めるなど、協力的態度の形成を促すこと示している。そのため、人々の地域への愛着や誇り形成の心理過程を検討することは社会的に意義があると考えられる。地域への愛着に関する先行研究²⁾では、居住年数の長さや地域社会とのつながりが愛着形成を促すことが示されている。しかし、これは理論的根拠に乏しいことから知見の一般性が低く、その実用性に疑問が残る。そのため、本稿では理論的観点から地域への愛着・誇り形成の心理過程を検討し、その形成促進策のあり方を提案することを目的とする。

2. 仮説

(1)「地域に対する愛着・誇り」と地域の「範囲」の定義

Hidalgoら³⁾は地域への愛着が一般的に「人々と特定の地域との間の情緒的な絆や繋がり」と定義されると述べている。本研究においても「地域への愛着」の定義を上記にならう。また、一般的に「誇り」はある対象を名誉とする感情のことを指すことから、「地域への誇り」は「地域を名誉とする感情」と定義する。

次に、地域への愛着は近隣の環境や住民とのふれあいから形成される²⁾と述べられているため、「地域」は行政区域に関わらず「普段、一定の人間関係があるような、居住地を中心とする生活行動圏」と定義する。

(2)仮説

社会的アイデンティティ理論では、組織への強い所属感がその組織に対するコミットメントの形成を促すことが述べられている⁴⁾。これに従えば、地域への強い所属感は愛着や誇りの形成を促すと言える。この地域への所属感は「景色が美しい」「住民との交流が多い」など、地域に関する認知が肯定的であるほど高まると考えられる。従って、地域に関する認知が肯定的であれば、地域への愛着や誇りの形成が促されると予測される。また、既存研究²⁾では地域への愛着や誇りの形成要因として、居住年数の長さを挙げている。しかし、居住年数が長くとも嫌な経験が多い場合、愛着や誇りは形成され難いと考えられる。従って、愛着や誇りの形成には地域に関する肯定的な認知が居住年数以上に強い影響を与えると予測する。以下に仮説を示す。

仮説 1 地域に関する認知が肯定的なほど、地域への愛着が高まる。

仮説 2 地域に関する認知が肯定的なほど、地域への誇りが高まる。

仮説 3 地域に対する肯定的な認知は、居住年数よりも地域への愛着形成に強い影響を与える。

仮説 4 地域に対する肯定的な認知は、居住年数よりも地域への誇り形成に強い影響を与える。

表-1 質問項目と α 係数、平均値、標準偏差

	理論的変数	質問項目	α 係数	mean	S.D.
土地に対する認知	景色の美しさ	この地域は美しい自然が豊かである。 この地域の風景や街並みは美しい。	.84	3.72	1.14
	歴史的風景	この地域の歴史から歴史が感じられる。 この地域は歴史を感じる風景がある。	.78	3.19	1.15
	交流の多さ	日頃 地域の人々と一緒に活動する機会が多い。 日頃 地域の人々とよく会話をする。	.80	3.23	1.12
集団に対する認知	行政の公正さ	地元行政は住民の役に立っている仕事をしている。 地元行政は住民のことを十分に考えている。	.77	3.17	0.87
	人々の親切さ	この地域は親切な人が多い。 この地域に対して愛着がある。	—	3.77	0.92
	地域への愛着	この地域に対して親しみを感ずる。 近所の人々に対して愛着がある。 地域の人々に対して親しみを感ずる。	.87	3.82	0.96
	地域への誇り	この地域に対して誇りを持っている。 この地域を誇らしく思う。	.85	3.64	1.08

3. 調査概要

市民の地域への愛着と誇り形成の心理過程を探るために、郵送法による質問紙調査を行った。調査対象者は全国16市町の選挙人名簿から有権者3000名を等間隔無作為抽出法により抽出した。有効回答者数は649名（男性323名、女性318名、不明8名、男女比50.4:49.6）、回収率27.1%、平均年齢は53.82歳(S.D.=15.67)、平均居住年

数は26.1年(S.D.=18.3)であった。回答者の属性に大きな偏りはなかった。調査票では普段の生活行動圏を想定してもらった上で、地域に関する認知や地域への愛着や誇りを6件法にて回答してもらった(表-1)。

4. 分析結果

(1) 地域への愛着・誇り形成の心理過程

本研究では地域に関する認知と地域への愛着と誇りを尋ねる理論変数を7つ設定した。これらの α 係数は.77以上であるため(表-1),各理論変数は一定の妥当性を持つといえる。

次に,共分散構造分析により地域への愛着と誇りの形成過程を検証した。その結果,地域に関する認知は「土地に対する認知」と「集団に対する認知」を介して地域への愛着と誇りを形成することが分かった。従って,仮説1と仮説2は支持された(図-1)。また,地域に関する認知と居住年数が地域への愛着形成に与える効果を線形仮説の検定により比較した。その結果,「土地に対する認知」と「集団に対する認知」から「地域への帰属意識」へのパス係数は「居住年数」から「地域への愛着」へのパス係数と比べて有意に大きかった($z=2.064, p<.05, z=11.66, p<.01$)。このとき,居住年数が地域への誇り形成に与える効果は有意ではなかった。従って,地域に関する肯定的な認知は居住年数以上に地域への愛着と誇り形成に強い影響を与えることが分かる。これより,仮説3と仮説4は支持された。

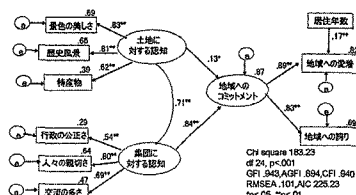


図-1 地域への愛着・誇りの形成過程

5. 考察

分析結果より,地域に関する肯定的な認知が高まるほど地域への愛着と誇りが形成されることが分かった。その後,線形仮説の検定により,土地に対する認知と集団に対する認知が愛着と誇り形成に与える効果を比較した。その結果,集団に対する認知は土地に対する認知以上に,愛着と誇り形成に強い影響を与えることが分かった($z=6.464, p<.01$)。これは愛着や誇りが形成される際には,人々の親切さなどの関係性要因が景観などの物質的要因以上に強い影響を与えていることを示唆する。このことは,集団価値モデルにおいてコミットメントの形成は資源分配の妥当性以上に尊重感などの関係性要因が重要とされていることから演繹される。また,分析結果より地域に関する肯定的な認知は居住年数以上に地域への愛着・誇り形成に強い影響を与えることが分かった。これらの結果は,愛着形成のためには,生活の質を高める政策が必要であることを示唆している。例えば,これからのまちづくりでは,美しく,かつコミュニケーション機能が高い施設を整備するとともに,住民がそれらを活用し交流を深められるような仕組みづくりが重要であると考えられる。

6. 結論

本研究では,地域への愛着と誇り形成の心理過程を検討した。得られた知見を以下に示す。

- ・地域への愛着と誇り形成には地域に関する認知が居住年数以上に強い影響を与えることが分かった。
- ・集団に関する認知は土地に関する認知以上に地域への愛着と誇り形成に強い影響を与えることが分かった。
- ・地域への愛着と誇りの形成のためには,美しく,かつコミュニケーション機能が高い施設を整備するとともに,住民がそれらを活用し,交流を深められるような仕組み作りが重要であることが示唆された。

参考文献

- 1) 若林直子, 赤坂 剛, 小島隆矢, 平手小太郎:住民の防災意識の構造に関する研究-その3:地域コミュニティとの関わりを表す項目を含む因果モデル-,日本建築学会大会学術講演梗概集, 2000, pp.807-808
- 2) Brown, B., Perkins, D., Brown, G.: Place attachment in a revitalizing neighborhood: Individual and block levels of analysis, *Journal of Environmental Psychology*, 23, pp.259-271, 2003.
- 3) Hidalgo, C., Hernandez, B.: Place attachment: Conceptual and empirical questions, *Journal of Environmental Psychology*, 21, pp.273-281, 2001.
- 4) Hogg, A.: *The Social Psychology of Group Cohesiveness -From Attraction to Social Identity-*, London, Harvester Wheatsheaf, 1992. 廣田 君美, 藤沢 等 訳:集団凝集性の社会心理学, 北大路書房, 1994
- 5) 大淵憲一:公正の社会的絆:理論と研究(未発行文献)